



M.N.

MIHO NAGATO OPERA CO.

The **MIKADO**

Gilbert and Sullivan

喜歌劇 **ミカド**

'81 7月3日(金) 6:30 4日(土) 5:30

東京文化会館

長門美保歌劇団

長門美保歌劇団公演

総監督

長門美保

喜歌劇

ミカド

ギルバート &
サリバン 曲

The MIKADO

'81 7月3日(金) P.M.6:30 4日(土) P.M.5:30

東京文化会館

主催 長門美保歌劇団

初演より35周年記念公演
ギルバート詞・サリバン曲・長門美保訳

喜歌劇 ミカド

総監督 長門美保

指揮／小泉ひろし
美術／大田創

演出／関矢幸雄
照明／東原修

—— キャスト ——

3日(金)		4日(土)	
小田清	ミカド	小田清	清
久岡昇	ココ	久岡昇	昇
高田作造	ナンキプー	丹羽勝海	海
藤井多恵子	ヤムヤム	田手道子	子
湯沢省三	プーバー	大石正治	治
安居史恵子	カティシャ	城君子	子
中里豊子	ピーポウ	吉野真理	理
中村まゆ美	ピティシング	栗田真理	理
的場安朗	ピシュタッシュ	佐藤貢	貢

演奏／東京フェスティバルオーケストラ

合唱／長門美保歌劇団合唱部

演出助手／熊谷章

舞台監督／安河内郁哉

表現指導／橘左橘

助手／岩間充俊

制作／宮永康生

副指揮／小出雄聖・本名徹次・十束尚宏 合唱指揮／鷺見譲治

練習P.／石川真澄・国枝春恵・西美幸・八木淳太

舞台装置／前進座 小道具／高津美術装飾(株) 衣裳／松竹衣裳K.K.

かつら／B&C東京 履物／エトアール工芸 メイク／井上すみれ・河合進
メーキャップ／ヘレナ・ルビンスタイン使用 印刷／(株)プリント・センター

長門美保



General Director Miho Nagato

「ミカド」って楽しいオペラですよっ！

長門美保

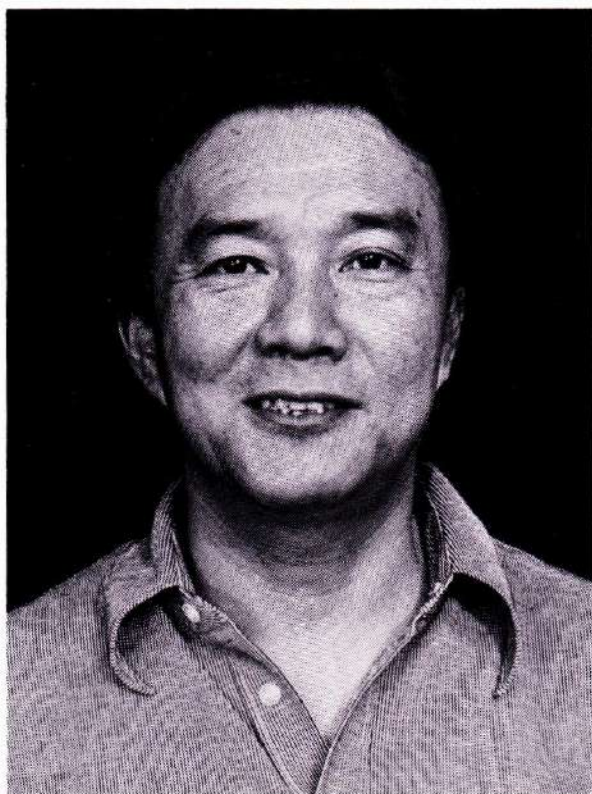
みなさまのまわりにある すべてのいやァーなことをすっかり忘れさせてくれるのが この楽しいオペラ「ミカド」です

表面たわいもないことのようなストーリーなのですが よく考えると どうしてどうして大変なきびしいことをいっているのです 特に現代の世相で一番痛いことをしてる人達には相当きびしいものが グンとくるオペラです

だから正しい生活の人にはとても楽しめるオペラだけど 一寸心にチクリと来る人には 相当 ドタマにくるオペラですけど 感じる神経が残っているかどうか問題ですね！

さて このオペラ 長門美保歌劇団が 昭和21年に 日本で最初に公演しましたが 当時の進駐軍に大変な人気で 北は北海道から 南は九州まで それこそ何百回という公演を重ね日本人の公演は日本語 外人用のは総て英語で 演出も外人がするという具合で仲々勉強が大変でしたが 色々のオペラをしながらの勉強でとても大変でしたが 嬉しい悲鳴でした

此度の公演は、とにかくそうした公演の積みかさねの中で迎えた35周年で嬉しく思っています これまでの回数と経験をふまえて長門美保歌劇団としては思い切った脱皮をして演出も衣裳も今までとは全然変わりました どうぞ今後とも色々アドバイスをいただきたく思います ではどうぞごゆっくりお楽しみ下さいませ



Director Yukio Sekiya
演出 関矢幸雄



Conductor Hiroshi Koizumi
指揮 小泉ひろし

あらすじ

第一幕

帝の息子、ナンキプーは年上の女カティシャとの結婚を逃れる為に、父の宮殿をぬけ出し、旅の歌い手となって遍歴する中、美しい乙女ヤムヤムを愛する様になったが、ヤムヤムを娶りたい願を持つ彼女の後見人ココに妨げられた。しかしココは恋を弄んだと云うかどで死罪の宣告を受けた。

第一幕が開くと、ナンキプーはヤムヤムが結婚の自由を得たか否かを確認る為、ティティブにあるココの館へと急いでくる。プーバー（傲慢な不正官吏）とピシュタッシュ（貴族）との話で、ナンキプーはココが打首どころか、反対に死刑執行官になった事を知る。その上、ココはその日の午後ヤムヤムと結婚する事になっていた。

万事、ココに好都合に見えていた折も折、帝から誰かを処刑しなければ、死刑執行官の職を奪うとの信書が来る。ココがどうしても処刑者を探さねばと云うので進退きわまっている所へ、ヤムヤムとの結婚に絶望して、自殺仕様ときめたナンキプーが現われる。ココは彼に一ヶ月間ヤムヤムと結婚して暮させると云う条件で、ナンキプーに一ヶ月たったら公衆の前で死刑になる事を承知させる。

これで解決がついて一同喜んでいる所へ、思

いがけずカティシャが、失踪したナンキプーを尋ねて現われる。しかし一同に逐われるが、自分はナンキプーを探し出して、この事を帝に知らせると誓す。

第二幕

ヤムヤムがナンキプーと結婚する事になったので、その支度をしている。一同が楽しい重唱をしている所へ、ココが入って来て、見て来たばかりの立札の話をする。妻のある男が死刑になった時は、その妻を生理にすべしと云うのである。ナンキプーはヤムヤムをそんな目にあわせない為すぐに自殺しようと決心する。しかし、ココは又々、他の者を探して処刑せねばなくなるので大騒ぎをする。その頃帝が丁度ティティブへ向って出立したと云う噂をきいたので尚更である。ナンキプーは思い切り良くその場ですぐ首を切ってほしいと申し出る。しかしココは練習しなければ処刑出来ないと言い出す。

そこでもう一つ案が出る。ココはプーバーに命じてナンキプーを処刑したと云う、偽の宣誓書をかかせて、ナンキプーとヤムヤムに国外へ逃れる事を命ずる。まもなく帝が現れる。ココは帝が処刑が済んだか否かを確認に来たものと思っているので、宣誓書を見せ得意になって処刑の様を述べる。しかし帝は実は失踪した息子を探しに出たカティシャを励ましに来たのである。ココと同類とは「太子殺害罪」の宣告をうける。今は宣誓書の偽を申立てて生きているナンキプーを法廷に引出すの外はない。しかしナンキプーがヤムヤムと結婚し、カティシャを捨てて了っているのがカティシャが二人の処刑を主張する事は火を見るより明らかなので、ココに罪で殺されるよりココががまんしてカティシャと結婚して、すべては目出たし目出度しで幕となる。



ミカド 小田 清 (3日)(4日)
Mikado Kiyoshi Oda



ナンキプー 丹羽 勝海 (4日)
Nanki-Poo Katsumi Niwa

〈ミカド〉と

長門美保歌劇団

宮 沢 縦 一

長門美保歌劇団というと、私は第一に〈ミカド〉を思い、次に〈お蝶（ちょうちょう）夫人〉を、すぐ連想する。

終戦翌年、戦災の傷痕が痛々しい東京に、日本に唯一つの藤原歌劇団の敢斗的大活躍に対して、颯爽と立ち上った長門美保歌劇団、それが最も得意とし、また出きばえよく上演したのが、いまあげた演目である。

〈蝶々夫人〉のほうは、古くからやられ、いまもあちこちの歌劇団でよく上演され、広く知られているが、〈ミカド〉は、これは長門美保歌劇団の専売というか、独壇上の演し物で、他にはその昔、藤原歌劇団が渡米したとき、あちらで上演したぐらいだとおもう。

それゆえ、〈ミカド〉というと、私が長門美保歌劇団を、すぐ連想しても、その実績、北海道から九州に及ぶ各地での数多の公演を去々するまでもなく、決してふしぎでない。

〈ミカド〉の一般公演というと、古い人たちは、

1948年（昭23）に、ドゥーリトルパークといわれた日比谷公園の公会堂で、金子登指揮の東京フィルに、長門美保、栗本尊子、三枝喜美子、高木清などが出演した時のものを想起されることと思う。しかし、それに先きだち、恰度いまから35年前に、東京劇場で早くも上演され、何かめんどろな問題があり、まもなく会場を公会堂に移し、そこで超満員の盛況を得ている。

いずれにせよ、その頃はオペラやバレエにも10割とか15割も課税された被占領下だから、やる方も大へんだったが、見たり聞いたりする方も大へんだった。

衣食住、万事にこと欠く異常時だったので、ヤミ市がはびこり、ファンの人たちはせめて心の糧をとか、或いは心のうさの棄てどころとばかり、こうした催しにもわんさと押しかけ、暖房のない凍るような寒さの会場で、外とうを着用、手をもみ、足をふるわせてきいていたのである。

出演者側も、本とうに不使不自由を耐え、歌うと吐く息が白くみえる舞台上、文化国家の一翼を担う気概を抱き、みなぎ協力一致、気迫ある舞台を展開してみせた。そうした双方の熱気が、このころよくある舞台と客席の間を仕切るカーテンのようなものを一掃、双方とも空腹を恋れ、歌い演じることや、見ききすることに、ともどもに先き甲斐を感じあっていた。

居ながらにして、毎年、世界一流のオペラが見



ナンキプー 高田作造 (3日)
Nanki-Poo Sakuzo Takada



ココ 久岡昇 (3日)(4日)
Ko-ko Noboru Hisaoka

聞できる今の人たちには、まるで想像もつかない奇異な事だらけだったが、いま想えばそれもまたなつかしい。

ギルバート＝サリヴァンの共作になるいわゆるサヴォイ・オペラについては、福原氏の別稿があるので、この機に私はもう暫らく長門オペラの〈ミカド〉のことを記させて頂く。

戦後、焼け野原の東京に、幸いにも戦災を免れた劇場が幾つかあったが、そのうち進駐軍、すなわち占領軍に接収されたものが幾つもあった。その最大のものが東京宝塚劇場で、戦死したアメリカの従軍記者アーニーパイルの名を採って、当時はその名で呼ばれ、日本人は従業員と出演者以外はオフ・リミット（立入り禁止）であった。

そこでは米軍将兵の慰安のため、各種の催しがあり、中には演奏会からオペラやオペレッタも含まれ、長門美保歌劇団がオペラの専属でオーケストラはアーニーパイル交響楽団で、主体はいまの東京フィルハーモニー交響楽団になる。

その〈ミカド〉は一般日本人は入場できないから、私は日本人の従業員のチーフの結城支配人から白い券を貰って、裏口で身体検査をされて観劇した。

セリフや歌はむろん英語で、ご承知のようにこの種の喜歌劇には、上演のつど、その時代に相応しいシャレや風刺、機知などを織りこんでするが、当時は進駐軍の演出家が注文をつけ、それらを加え

てやり、それがまた大受けに受けたようだ。またジープに乗ってミカドが出るシーンなんかも受けたし、かつらを忘れたのまで、兵隊に受けたので、その後はわざとかつらなしで出て「エクスキューズ・ミー」とあやまることにしたとか、いろいろな逸話がある。

〈ミカド〉はいまも英米系の国での上演が多いが、異国趣味ばやりのある時期には、ドイツやオランダなどでも訳詞でよく上演をみている。

しかし、空想の所産とはいえ、戦前の日本では、ミカドすなわち天皇は「神聖にして侵すべからず」の現人神だったから、絶対上演は許可されず、他国でこれが上演される時も、しばしば大日本帝国大使館から苦情が出た。

〈ミカド〉は1884年〈明17〉にロンドンで初演されてから、2人の共作者の最大のヒット作となったが、その当時、早くも日本政府から抗議が出たものの、ヴィクトリア女王に笑殺されて終わっている。しかし、その後、日英同盟当時、1907年（明40）には、同盟国の顔を立てて、英国政府が上演停止の措置をとり、かなり問題になったという。

その位だから、その昔は映画の〈ミカド〉の輸入上映も禁ぜられていたが、戦後は長門オペラが国立劇場の晴れの舞台上、管弦楽まで舞台上にのせ、派手に上演、これまた話題になったのを覚えている。35年記念の今回の上演は、如何に仕立てて上演するか刮目している。



プーバー 湯沢省三 (3日)
Pooh-Bah Syozo Yuzawa



プーバー 大石正治 (4日)
Pooh-Bah Masaharu Oishi

“オペレッタ”
ってなーに

藤田由之

日頃からにくからず思っていた女生徒が、ある時 寄ってきてこうたずねた。

「先生、オペラ・ブッフアって、何のことですか」
相好そうごうをくずして、先生は、

「喜歌劇のことだよ」

と答えて、さらにその歴史的なことでも話してやろうかと身構えると、それを聞こうともせず
に、彼女はこうつづけた。

「先生は、この前オペレッタのことも喜歌劇っ
ておっしゃいましたね。そうすると“フィガ
ロの結婚”は、オペレッタなんですか」

彼女の目的は、どうやらここにあったようである。この時ほど、この愛くるしい女生徒が憎らしく見えたことはないし、外国語をやたらに日本語におきかえることの難しさを感じたことはなかった。

これは、ある高校の先生の述懐である。もっとも、多少大袈裟な結論のついているこういった話も、昨今だから起ったようなもので、戦後の一時期など、横文字を使うことを一時禁止されてきた世代とか、戦前派でもとくに音楽に関心をもっていなかった世代にとっては、オペレッタというのが何であるのかわかっていなくて当然のようなところがあった。もちろん、オペラとオペレッタとを区別しようなどという次元の話ではない。そうした中で、啓蒙を意識していたかどうかは知らないが、藤原歌劇団や長門美保歌劇団が、オペラやオペレッタの公演を重ね、戦後の荒療から立ちあがりつつあった人びとを楽しませていた功績は大きい。私なども、その思慕に浴したひとりであるが、それは、ある意味で現在よりもはるかによき時代であったようにも思われる。「ミカド」の初演も、たしかその頃のことであつたらう。

こういった当時の大歌劇団の公演にまじって、その頃、すでに故人となられた沖不可止氏の指揮によって、東京都民合唱団を使つてのオペレッタの公演があつたことも忘れられない。いわばアマチュアの集りではあつたが、じつに熱心なものであつた。「ブン大将」とか「コルヌヴィユの鐘」な



ヤムヤム 藤井多恵子(3日)
YumYum Taeko Fujii



ヤムヤム 田手道子(4日)
YumYum Michiko Tade

どが上演されたように記憶しているが、その公演に出演した団員のひとりが、何も知らない、というよりも、潜在的に西欧音楽に拒否反応をもっていらしい母親を、その公演に誘った。

「オペレッタに出るから聴きにきてよ」「何だい、オペレッタって」

本当の事をいったら来てくれないかもしれないので、

「おもしろいお芝居よ」

どうして娘が芝居に出るようになったのか、わからないまま、その母親は、歌舞伎にでも行くようなつもりで、僅かにのこった外所行きよその和服などをとり出して、日比谷公会堂へ出かけた。おそらく、その雰囲気の違いに驚いたにちがいないがともかく、可愛い娘が出るとあって、最後までいたそうである。そして、その日帰ってからのふたりの会話は、こうであったという。

「どうだった、おもしろかったでしょ」

「ああ、でも、なんであんなに歌なんか歌うのかね。歌じゃない方が、もっと筋がよくわかるのにね」

オペレッタから歌をとったら何が残るか、その計算は、どなたかにおまかせしよう。しかし、こ

ういいながらも、母ひとり娘ひとりのその家ではこれを機会に、母親の西欧音楽への拒否反応も消え(もともと、そんなものはなかったのだろうが)親子連れだってオペラを見に行くようにもなったという。

ところで、話を前にもどすが、オペレッタが、いっ頃、だれの手によって喜歌劇と訳されたのかは、私にはわからないが、性格的には喜歌劇となる筈のオペラ・ブッフアである「フィガロの結婚」は、たしかにオペラとしか呼ばれていない。とはいえ、正確にはいつとも知れず、18世紀なかば頃から使われてきながら、19世紀後半になってようやくそのイメージが確立されたというオペレッタの源泉が、あきらかにオペラ・ブッフアにあるというのだからややっこしい。もっとも、そんなことはどうでもいいのだが、音楽辞典ではなく、このイタリア語を英語の辞典(研究社の新英和大辞典)でみると、「オペレッタ、軽歌劇(軽快な内容の短編歌劇)」とある。要するに喜歌劇とは訳されていないのである。そこで、これを機会に、その辺にある辞典をやたらにひっくり返してみた。その結果は、いずれお知らせする機会もあろう。でもオペレッタは、オペレッタと呼ぶのがやはり一番良いように思うが。



ピティシング 中里 豊子 (3日)
Pitti-Sing Toyoko Nakasato



ピティシング 吉野 真理 (4日)
Pitti-Sing Mari Yoshino

ある若き学徒の
「サヴォイ・オペラの研究」

福原 信夫

詩人ギルバートと作曲家サリヴァンの合作による「サヴォイ・オペラ」についての研究書は、わが国ではほとんど皆無にひとしい。

さすがに英国はその故郷だけに、ロンドンの古書店でその膨大なコレクションにおどろいた事があるのだが、その不当に少ないわが国に、一冊の注目すべき研究書があることを紹介したい。

明治43年(1910)、東京・牛込に生れた福田義孝という人があった。幼いとき原籍地の熊本県天草に移ったが、昭和5年(1930)、早稲田大学文学部英文科に入り、大学院在学中病を得て帰郷し、昭和11年(1936)郷里において病没した、享年26歳であったが、その研究テーマである「サヴォイ・オペラの研究」が、その愛息を失った父親の福田梅吉氏により出版された。その巻末に「素より生者必滅の理は辨まえ、会者定離の鉄則は覚れども、

尚ほ未だ、此煩惱妄執の想去り難く、せめては愛子の霊を慰むる方法として」(原文通り)としてこの一冊を上梓されたのだが、この涙ぐましい父子の情とともに、サヴォイ・オペラの概容が我国に紹介された意義は大きく、その父親の意は十分に満されたと言うべきであろう。

この著書はおそらく卒業論文として書かれたものと推察されるが「序論」として「人生と芸術」を論じ、「本論」として「歌劇の本情」、「ワーグナー論」を展開しているが、その本題は本書の題名の如く「サヴォイ・オペラ史」であり「ギルバート及びサリヴァン論」と「作品研究」である。

ここに今回の「ミカド」上演に関連ある部分を引用させて頂く。

「ギルバートとサリヴァンによって合作されたサヴォイ・オペラは19世紀の英国歌劇において最も光輝ある存在である。」と述べ、オッフエンバックはすぐれた才能の所有者であるにもかかわらず、良き台本作者を得られなかったのに対し「ギルバートとサリヴァンは共にその優雅な点に於いて生きている。实际的にギルバートは最初にプロットを立て抒情詩を書き、それにサリヴァンが従った。それが歌劇を作るところの真の順序である」とい



ピープボウ 中村 まゆ美 (3日)
Peep-Bo Mayumi Nakamura



ピープボウ 栗田 真理 (4日)
Peep-Bo Mari Kurita

うクイラー・カウチの言葉を引用し、「劇的において、音楽において、最も円満に調和されたところの芸術的理想境を、我々はサヴォイ・オペラの中に見出すことが出来る」と結論している。

「ミカド」について筋立てを述べた後「この作品はサヴィオ・オペラの中では最も通俗的な作品である。ギルバートのコミック作者としての傑作であり、サリヴァンとしてはいつもの通り調子のよい音楽に、特に言葉の興味をあらわすことに努めて成功している。彼等の世界的名声を高めたのは、実にこの作品に依るのであった。そしてこの「ミカド」の中の「情深いミカド」と「可愛い柳」はギルバートがバブ・バラード「自殺者の墓」に再録し熱狂的な歓迎を受けたと伝えている。

ギルバートは衣裳や装置について苦心したという、なにぶん100年近い昔の当時にあっては当然なことであつたらう。彼は当時ロンドンのナイツブリッジに日本人が多く住み、「日本村」と呼ばれてロンドン人の興味をあつめていた地域をしばしば訪れたという。

「そもそも彼が、かかる日本を背景としたものを作ろうとした動機は、いつも彼が書齋にかけて居た日本刀が、ある偶然の時に落したので、それ

を拾ったときにあったと言われている」と興味あるエピソードを伝えている。

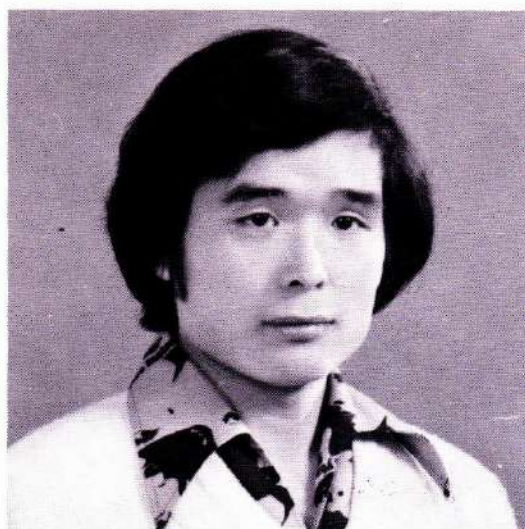
だがギルバートはこのオペラを単なるファンシー的なものとして書いてはいない、われらの高等刑吏郷をあがめよ」と威張って現れるココが、能力もない洋服屋であり、「ミカド」の命令にあわてふためく「バルギート特有の逆転法」を用いていることを指摘し、「日本では女は50歳にならないと分別がない」とヤムヤムに言わせ、「17歳から49歳までは無分別」と言うのも当時の英国の婦人たちに対する諷刺であった。

「ギルバートは恋愛は礼賛するであろうが不道徳は憎んだ。彼がヤムヤムとナンキプーの間にかわす法律問答について、彼の諷刺するところは法律であった。実社会において法律は真の美しき愛を壊すことがあるし、不道徳がなんら罪を受けず、道徳者が逆に罰せられることがある。彼の逆転法のノートに書いてあった如き実在である。彼は皮相的な法律を嫌った。その法律を振りかざす法律家や政治家を嫌った。しかし真の意味に於いて法律に従わなければならない。彼は決して不当な理屈を言うのではない」

このオペラの背後にあるギルバートの理想は見



ピシュタッシュ 的 場 安 朗 (3日)
Pish-Tash Yasuro Matoba



ピシュタッシュ 佐 藤 貢 (4日)
Pish-Tash Mitsugu Sato

逃すことは出来ないのだが、劇中でもヤムヤムは「すべてのものはおどけのもとよ」と歌い、ピティンクも「人生はたった今はじまったばかりのふざけだよ」と歌っている。この言葉は「ギルバート自身の言う言葉にちがいない」。シェークスピアも「ウインザーの陽気な女房たち」の幕切れで、ページ夫人に「さあ、みんなで家に帰って、炉端で今夜の出来事を笑い話にしましょう」と言わせているし、ヴェルディも「ファルスタッフ」の最後を「世の中はすべて道化の世界さ」と壮大なフーガで結んでいる。

このオペラは舞台や衣装も日本であり登場人物も日本人である。だがその思想はあくまで英国流であり、むしろ人間の本質的なものと言うことが出来よう。

この機会に同じ早稲田の森に学んだ先輩福田義孝氏の遺稿の一端を紹介した次第である。(昭和11年12月刊、東京堂。なお、文中引用した部分の一部を書き直させて頂いたことをご了承ねがいたい。)

ミカド・シヨーゲン

タダの人

小 島 美 子

「ミカド」が作られた百年ほど前には、ヨーロッパの人々にとって日本は何か文化果てる極東というぼんやりしたイメージの中にあっただろうと思う。その代り想像をたくましくする余地も夢もあっただろうし、その意味では日本で一番エライことになっている特異な存在ミカドの名は、好都合な題材だったに違いない。そしてその頃、日本人は進んだヨーロッパの文明に対してひたすら驚き、文化の性質の違いなどについては考える隙もなく、ともかくもこれを真似ることに狂奔していたのだから、こちら側から考えてもヨーロッパと日本の関係は似たようなものだったのだろう。音楽の方でも西洋人のソプラノの声を鶏の首をしめたような声と不快がり、三拍子のリズムを“一二三や、一二三や”と数え、それでも洋楽をとにかく始めた時代のことだった。



カティシャ 安居 史恵子 (3日)
Katisya Fumieko Yasui



カティシャ 城 君子 (4日)
Katisya Kimiko Jyo

ところがそれから百年経って、衰えかけたヨーロッパ文明に加えて雑多な文化をとり込んで急成長したアメリカで、昨年ほどなたもご存じのように映画の「ショーゲン」が空前の大ヒットになった。欧米人から見てまず気になる存在がミカドであり、その次がショーゲンであった、という調子がよ過ぎるのだが、とにかく、この映画では、もやは「ミカド」とは違って、明らかに日本を舞台にして、日本人の生活や文化をそれなりに具体的に描こうとしていたらしい。そしてこれをきっかけに日本ブームが起こったという話で、それは音楽の分野にも及んでいる。「ショーゲン」以前には芸術的な音楽の分野で先進的な作曲家や理論家などが、日本の一部の音楽に興味をもち、日本の楽器を使ったりしていただけであったが、「ショーゲン」以後はロックなどポピュラーな分野の人々が、日本の箏や三味線・太鼓などを使ってかなり評判になったりし始めた。また日本風の味つけをもったグループのイエロー・マジック・オーケストラが欧米で注目されるなど、日本人が意識しているよりもはるかに、日本の伝統的な音楽を生かした音楽には国際的に新しい評価が生まれ広く一般の人々に広がりつつあるようだ。そのことは10

年前はもちろん、数年前と比べても質的に異なってきたように思われる。

そして今、世界中で日本が話題になっているのはどなたもご存じのように自動車問題だ。いろいろな問題があるにせよ、ここではとにかく近代工業の生産物が問題になっているというところに、今の欧米と日本の文化の評価の相対的な関係が変わってきたことが象徴されているのではないかと思う。日本の自動車が象徴しているのは、ミカドでもなくショーゲンでもない。日本のタダの人々の力ではないだろうか。そしてそのタダの人々のもっている日本の本来の音楽も、ようやく注目される時代になってきたのではないだろうか。それを百年前の「ミカド」の上演に当って、かえってそのことをつくづく思うのだが、実は今、北京において、毎日中国の伝統音楽に接して、中国のタダの人々の大きな力をひしひしと感じさせられているのである。